

「与える幸い」を生きる

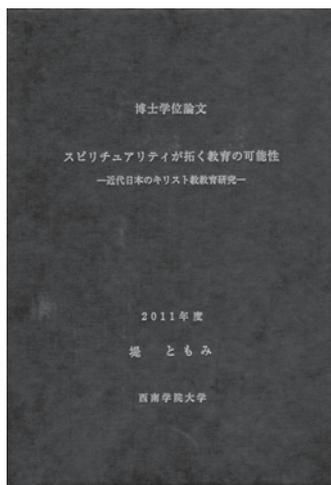
— 西南学院中学校・高等学校で教える —¹⁾

塩野和夫

はじめに

西南学院中学校・高等学校の「2013年度 夏期教員研修会」講師の依頼を受けた時、躊躇した。中学校・高等学校と大学では教育現場が違うからである。それでも、講師を引き受けた理由は2つある。1つは現職の高等学校教員である堤ともみ氏の論文指導をする²⁾なかで、彼女の問題意識と真向かいになっていたことである。もう1つは2013年5月に出版した『キリスト教教育と私 前篇』で、自身の中高生時代についてまとめていたからである。

堤氏は2008年当時、八女市にある県立福岡高校でベテランの英語教員であった。すでに修士課程を終えておられたので、3年間の研究休暇をとって博士論文執筆に挑戦された。



博士学位論文
スピリチュアリティが拓く教育の可能性
—近代日本のキリスト教教育研究—
2011年度 堤ともみ 西南学院大学

1) 本稿は2013年8月28日から29日にかけて嬉野バプテスト教会において開かれた西南学院中学校・高等学校の「2013年度 夏期教員研修会 今、西南学院の教員として立つこと」で行った講演をまとめたものである。

2) 堤ともみ氏は2008年4月から2011年3月まで西南学院大学大学院後期課程に在籍され、塩野和夫の指導を受けられた。

並々ならぬ決意の根底にあったのは高等学校の教育現場から生じていた問いである。彼女は「生徒をしつけ、教えている」。しかし、現場の課題に追われる日々「本来の教育、教育の原点を見失ってはいないか」と考えられた。そのような問題意識から生じた問いは極めて実存的な性格を持ち、教師と生徒の生き方にまで関わってくる。ここに彼女の研究に取り組む動機があった³⁾。

堤氏は動機だけを持って大学院に来られた。だから、末尾の「資料1」にある目次の内容に関してはあの時点で何も持ち合わせていなかった。けれども、自らの課題に踏みとどまり、そこを掘り下げながら教育について考察し続けることにより、博士論文という学問的成果に到達されたのである。

1 問題の所在 — 西南学院中学校・高等学校教師という職業 —

(1) 教師という職業

現場の課題に追われる日々「教育の原点を見失っていないか」という堤氏の問いは、中学校・高等学校教員に共通する問題意識だと思われる。そこで、「教育とは何なのか」「人を育てるとはどのようなことなのか」を考え直してみたい。

大阪府の河内長野市に清教学園というキリスト教系学校がある。この学校に母教会（日本キリスト教団 香里教会）の同じだった安達英行氏が就職する。それで枚方市牧野から河内長野までの引っ越しを手伝った。小さなトラックにいっぱい荷物を積んで、ロープでしっかりと括る。荷物の落下を見張るためにロープにつかまりながら荷台に乗った私は、香里団地で車内に移った。若い日の思い出の一コマである。

それから、数年後のことである。あだっちゃん（安達氏を親しみを込めて「あだっちゃん」と呼んでいた）が「塩野なあ、……」と切り出し、深い実感

3) 堤ともみ氏の研究への動機については、下記を参照。「はじめに」（堤ともみ『スピリチュアリティが拓く教育への可能性 — 近代日本のキリスト教教育研究 —』1-3頁）



安達英行（前列左端）塩野和夫（前列左より2人目）
香里教会青年会ハイキング（1971年秋）

を込めて語りかけてきた。

塩野なあ、…。教師という職業は教えている時間だけじゃなかった。すべてが束縛されていたんや！休んでいるときも遊んでいる時間も、すべてが教育のためにある。いや、そうしないと教師という仕事は務まらへんのや！教師という職業、思っていた以上にたいへんやった。

衝撃的な言葉だった。それ以来、教師という職業をイメージする際に安達氏の言葉が原像となっている。

(2) 教師にとっての職業と人生

安達氏の言葉は直接には、「教師という職業は時間と能力、それに関心の大半を求められる」ことを語っていた。就職した当初、あだっちゃんはおそらく「教室で教えている」教師の姿だけを想像していた。そこでは、学校以外の場

所には自由な空間が広がっていた。

ところが実際に教師を数年経験してみると、そんな甘いものではなかった。自宅に帰ってくつろいでいるときも、遊んでいる時間も、どこかで学校のことを考えている。それは教科内容の工夫であったり、担任している生徒に対する指導だったりと様々だろう。いずれにしても、学外においても考え続けないと教師は務まらない。

あだっちゃんが驚きを持って実感した教師という職業に対する認識、それは何を意味しているのか。

そこにはあだっちゃんが直観した量的な観点から質的な世界への転換が生じている。つまり、量的に「時間とか能力、関心の大半を求められる」教師という職業は、「教育に携わる人たちの人生を決定する」という質的な転換をもたらす。教師の人生は「教育にいかに関わっていたのか」という内実によって決められる。したがって、中学校・高等学校の教師という職業には実に重く真剣な真実が込められている。

(3) 生徒の場合

それでは西南学院中学校・高等学校で学ぶ生徒の場合はどうなのか。

生徒が教師と同様に「与えられた時間と能力、それに関心の大半を学校生活に注ぎ込んでいる」ことは周知の事実である。彼らは多くの時間を費やして学校で学んでいる。放課後の部活動も重要な学校教育の一環である。時として部活動は休日にも行われるだけでなく、そこで得た仲間は青春を共に過ごすかけがえのない友人ともなる。さらに、塾や自宅での学習も学校生活を中心に組まれている。こうしてみると、西南学院における生徒の3年間あるいは6年間のほとんどは学校生活に費やされている。

しかも、彼らが西南学院で学ぶ時期は自我を形成するかけがえのない青春である。それゆえに、生徒においても量的に「3年間あるいは6年間の時間と能力と関心の大半を注ぎこんだ」月日には、質的な転換が生じている。学び、遊び、語りあった青春の日々に生徒は人間の基礎を形成していたという質への変

化である。したがって、教師は生徒と適切な距離を保ちながらも彼らの青春に寄り添って、中高生の自我形成を側面から支援しなければならない。

そこで、生徒と教師で構成されている学校において教育とは何なのか、その課題をまとめておきたい。

(4) 教育の場 — 教師と生徒 —

生徒は青春の多くを注ぎ、教師も人生の意味を賭けている。それが中学校・高等学校における教育という場であった。それならば、この教育の場を西南学院中学校・高等学校の教員はどのように認識しているのだろうか。

一つの問題を提起しておきたい。成績評価と人を育てることの関わりについてである。生徒に対する教育の成果は成績で測られる。これに問題はない。しかし、成績評価と人間としての成長は正比例するものなのか。成績の良い生徒は自動的に人格的にも健全な成長をしていると保証できるのか。

観点を変えて語ろう。現在の学校教育が直接には成績の向上を目指していることは明らかである。しかし同時に、人間を育てることこそ教育の根本的な目的はある。そうだとしたら、多くの点数を獲得するようにと指導する教育において同時に人間を育てることは可能なのか。もし可能だとしたら、そこにはどのような教育上の工夫が必要なのか。

成績と人間形成をめぐるこのような教育の課題に関して、ここからは教師に焦点を絞って検討を続けたい。

2 「与える幸い」とは何か

教師の立場から教育を考えるために、ここでは現場を離れてそもそも「教えるとはどのようなことであるのか」を考える。その際西南学院はキリスト教教育を標榜しているので、「キリスト教を根底に据えて教えるとは何を意味するのか」を聖書の言葉から考えたい。使徒言行録第20章35節である。

(1) 使徒言行録第20章35節

使徒言行録第20章35節は小アジアのミレトスでパウロが語った訣別説教における結びの言葉である。次の通りである。

あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が「受けるよりは与える方が幸いである」と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。

パウロは深い思いを込めてこの訣別説教を語っている。説教の内容がパウロの生き方に裏付けられているところにも、その深さは証しされている。それならば、訣別説教で語るパウロの生き方とはどのようなものであるのか。彼は自らの生き方を示して、「弱い者を助けるように、……わたしはいつも身をもって示してきました」と解き明かす。それは「与える幸い」に基づく生き方だった。パウロによるとこの生き方はイエスの教えにさかのぼる。

ところで、4つの福音書にイエスの言葉として「受けるよりは与える方が幸いである」は記されていない。しかし、たとえばG. シュテアーリンによるとこれはイエス自身にさかのぼる⁴⁾。しかも、使徒言行録第20章35節にある「幸い」は、山上の説教（マタイ福音書第5章3～12節、ルカ福音書第6章20～23節）においてイエスが説いておられる「幸い」と同じ言葉である。つまり、イエスは「心の貧しい人々は、幸いである」「悲しむ人々は、幸いである」と並んで「与える人々は、幸いである」と語っておられた。

4) 「しかし話の一番最後で、パウロは聴衆の視線を、彼がいつもそうしているように、自分からイエスへと転じさせる。伝道者パウロの最後の言葉としてルカが報告しているのは、イエスの言葉である。これは『主の言葉』として決定的な基準となるべきであるゆえに（Ⅰコリ7章10節、9章14節、11章23節、Ⅰテサ4章15節参照）、この言葉の『想起』はきわめて重要である（11章16節、ヨハ14章26節、2章26節、ルカ22章61節、24章6～8節・44節、Ⅱペテ3章1～2節参照）。ここに引用された主の言葉は、新約聖書のほかのどこにも出てこない。これはテサロニケ人への第1の手紙4章15節（以下?）とならんで、福音書以外にある最古のイエスの言葉である」。G. シュテアーリン、大友陽子他訳『使徒行伝 翻訳と註解』547～548頁

そうだとしたら、「与える人々」はなぜ幸いなのか。西南学院中学校・高等学校で教える教員の現実に即して検討したい。

(2) 「与える幸い」の宗教的意味

ここで対象とする「宗教」は直接にはキリスト教である。そこでキリスト教の立場において、「与える幸い」にはどのような意味があるのか考えたい。

まず、「与える幸い」はイエスの生涯と死の全体をたった一言で表現している。イエスは必要とするものを与える人だった。病める人・貧しい人・疎外に苦しむ人々に対して、彼らが本当に必要としているものを与えた。与えることによって人間としてふさわしく生きる道を開かれた。

だから、パウロはイエスに従う者として「与える幸い」を生きた。キリスト教信仰の一面はイエスに従って生きることにある。イエスは自ら与えつつ、「与える幸い」を教えられた。だから、イエスに習ってパウロもまた「与える幸い」を生きた。

G. シュテューリンはこの生き方が「終末論的」特色を帯びていると指摘する。

イエスの祝福の言葉がそうであるように、これらも終末論的な言葉である。あらゆる自己追求から解放され、純粹に愛から与えることにおいてすでに現在新しい被造物が出現しているのであり、神はこれを当時も今も肯定される。というのは、まさにこれが祝福の言葉の意味だからである⁵⁾。

終末論において、この世的なあらゆる価値は相対化されている。そこにおいてはイエスの恵みが信仰者を生かす力となり、この世的な自己追求から彼らを解放する。そこで信仰者は愛を生きる。このようにして、新しい被造物が出現している。これが「与える幸い」の宗教的意味である。

しかし、これだけでは「与える幸い」に関する考察は十分でない。西南学院

5) G. シュテューリン、前掲書、548頁

中学校・高等学校の教育がキリスト教徒ではない多くの教員に担われているからである。

(3) 「与える幸い」の倫理的、即ち普遍的意味

キリスト教徒にとって「与える幸い」は深い意味を持つ言葉である。しかし、それだけではないところに「与える幸い」の特質がある。なぜなら、「与える幸い」は倫理的なあるいはすべての人に開かれた普遍的な呼びかけとして受け止めることができるからである。つまり、キリスト教徒に対してだけでなく、キリスト教信仰を持たない人々にとっても意味ある言葉なのである。

イエスがされたように、病める人・貧しい人・疎外された人に必要なものを与え、人間としてふさわしく生きることを願う。そのような生き方は人間として尊い生き方に違いない。そこにおいて、「与える幸い」は倫理的な次元における価値を認められ、行動の規範とされている。だから、多くの人は「人を生かすために与える生き方は尊い」と思う。けれども、なかなかそんなふう生きることのできない現実もある。

いずれにしても、「与える幸い」にはキリスト教においても、キリスト教徒ではない人々にとっても広く共有される価値観がある。

(4) 教育現場を「与える幸い」から考える

「与える幸い」の特色はキリスト教信仰においてだけでなく、普遍的な倫理性からも価値を認められる幅広さにあった。この事実は西南学院中学校・高等学校の教育現場を「与える幸い」から考察できる可能性を示唆している。

そこでは、「教育とは与えること」だとされる。教師は教育の現場で様々な生徒に「与える」。しかも、教育活動において与える行為を、彼らは「それこそ人間として幸いなのだ」と判断する。したがって、生徒たちに与えることは教員の人生の貴重な内容となっていく。そうだとしたら、教育の場で「与える」とは具体的にどのような内実を指すのか。

ここからは私がキリスト教系中学校・高等学校で受けた教育を事例として紹

介しながら、教育において「与える」とはどのような事柄なのかを考えていきたい。

3 「与える幸い」によって解き明かされる教育

1965年4月に同志社香里中学校に入学し、1971年3月に同志社香里高等学校を卒業した。事例はいずれもこの6年間に受けた教育内容とその分析である。なお、ケースを取り上げる上での基本的な問いは「生徒と教師にとって教育の場とは何か？」である。この問題意識に基づいて『キリスト教教育と私 前篇』（教文館、2013年）⁶から事例を取りだし考察する。記した頁数はいずれも同書のものである。

(1) 見守る

同志社香里中学校・高等学校における6年間を振り返り、教育の土台にあったのは教員による「見守り」だったと気づかされる。先生方は人格的存在としての生徒をたえず気にかけて下さっていた。そこにはキリスト教における祈りとの類似性を認めることができる。

たとえば、中学1年生の担任で数学を教えられた金子先生が言われたのは、いつも「塩野君、運動部に入りなさい！」という勧めだった（69頁）。「勉強してますか」と聞かれたことは一度もない。だから、中学1年生の12月に柔道部に入って、先ず報告に行ったのが金子先生だった。

中学2年生以来、購買部などでお会いすると「塩野君は今、何の本を読んでいますか？」と声をかけて下さったのは赤尾秀之助先生である（70頁）。ある事情により中学2年生の2学期から勉強に身が入らず、時間があると図書室に通いむさぼるように宗教関係の本を読んでいた。すると、中学1年生の国語を担当下さった赤尾先生は名前を覚えておられ、「塩野君は今……」と声をかけ

6) 論文末尾に資料2として『キリスト教教育と私 前篇』の目次を記している。

て下さった。うれしかった。

教員室に呼び出し中学3年生の私に「塩野，中間の英語どうしたんや。……しっかり勉強せんといかんで！」(103-104頁)と注意されたのは那須淳男先生である。先生は他の科目の成績も調べておられて「特に英語の成績が悪い」と指摘して下さった。

高校3年生のクリスマスに洗礼を受けた。年が明けるとなぜか体育の野原康一先生に報告に行った。野原先生は柔道部の部長でもあった。すると、「塩野が教会に行っていることは以前から知っていた」と前置きして、「そうか，クリスマスに洗礼を受けたのか。おめでとう！」(199-200頁)とお祝いの言葉をかけて下さった。ずっと野原先生の見守りのもとにいたので，報告に行ったのだとあの時に分かった。

このように，教育の場における先生方の様々な見守りがあって，人間として成長できたに違いない。

(2) 教える

先生方は授業に様々な創意工夫をしておられた。よく準備された豊かな授業は生徒を引きつけた。

たとえば，赤尾先生である。先生は確かに頭の良い方であった。中学1年生の国語の授業で誰にでも分かるように現代文を明快に分析された。その上で，手振り身振りを交えて文章の向こうにある世界や執筆者の思索を解き明かされる。生徒は思いもおよばなかった豊かな時間を過ごすことができた(69頁)。

対照的なのは浜里満典先生である。中学3年生の担任で国語を教えて下さった浜里先生は情熱の人だった。先生は熱のこもった言葉を直接生徒にぶつけられた。熱心さの質が赤尾先生とは違ったのである。中学校卒業式の日メッセージにあった「しかし，諸君は労働する代わりに高校に進み勉強します。だから，しっかり勉強して下さい。働いている人たちに恥ずかしくないように，勉強に打ち込んでください」(109-110頁)は忘れることができない。



国語の浜里満典先生

高校1年生の数学を担当された秋山先生と地理を教えて下さった中村先生も対照的だった。秋山先生は丁寧に準備されていた。だから、ほそほそと話される数学の授業には明快な論理が貫かれていた(116頁)。中村先生は授業のポイントを押さえた上で、わざと大阪弁丸出しの口調に手振り身振りを交えて「君たちなあ!」と話しかけてこられた。生徒はたちまち先生の世界にのめり込んでいった。(117頁)

もう一組、高校2年生で倫理社会を教えられた木村先生と世界史の清水先生も対照的だった。木村先生はギリシャ哲学から初めて世界の思想をゆったりと講義された。先生の話しを聞いていると世界の哲学者が浮き彫りにされ目の前



世界史の清水陸夫先生

に顕れてくるようだった。それに対して世界史の清水先生はまさに言葉の人である。個性豊かな動作・口調・話題でたちまち生徒を虜にされた（144-145頁）。

いずれもそれぞれの仕方でよく準備された授業だった。入念に考えぬかれた講義からは先生方の個性や生き方がにじみ出てきた。だから、学ぶとはただ知的に授業の内容を受け止めるだけではなく、先生方の生き方と出会い教えられることでもあった。

(3) 耳を傾ける

講義を土台として中学・高校の教育によって人間を育てるために、教員の「耳を傾ける」努力があった。

たとえば、生死を重要な課題としたために勉強に身が入らなかった中学2年生の夏以来、「死の問題を解決しないで勉強しても、何の役に立つのですか？」

と先生方に聞いた。中学2年生に日本地理を教えられた若い先生は戸惑いながらも「僕にも分からない。しかし、中学高校の時ほど広く学べる時はない。これも大切なことだよ！」と教えて下さった。誠実な態度だった。高校2年生の倫理社会を担当された木村先生は「塩野，キルケゴールを読みたまえ！」と言って、白水社から出ていたシリーズを教えて下さった（92-93頁）。

高校2年生の秋には生島吉造先生に悩みをぶつけた。一生徒の話に耳を傾けて下さった校長はご自身の経験で答えられた。「あの時、海老名先生のおっしゃることは『本当にそうだ！』と思えた。海老名先生の言葉で私は救われて、悩みの向こうにかすかな希望を見ることができた。今の塩野君にはこの話を贈る」（158-159頁）。

耳を傾ける行為には生徒の活動に対する支援もあった。高校3年生の秋に10名ほどのクラスメイトと文化祭で展示を行った。クラス担任は那須先生である。準備にのめり込んでいく生徒を初めのうちは見守っておられた。しかし、みんなの帰りが遅くなると、先生は心配して教室へ様子を見に来られた。さらに帰りの遅くなった最後の週には、とうとう差し入れを手にして応援に来て下さった（194頁）。

そして、文化祭を迎えた当日の朝である。「同志社今昔」の展示会場となった3年E組には10名くらいの同級生がいた。そこに同志社香里中学校・高校の生徒に交じって、生島校長や英語の林先生、数学の川人先生などが次々と来室され、熱心に展示物の説明を生徒から聞いていかれた（194-195頁）。それは生徒には意外な出来事だった。展示内容を先生方はよく知っておられたはずだからである。

思春期特有の悩みに耳を傾けて応え、文化祭の展示に対してはこれを支援し足を運んで関心を示す。このようにして耳を傾けた教師は自我形成期に揺れる生徒に寄り添い、人生の先輩として彼らに指針を示す存在であった。



3年E組担任 那須淳男先生

(4) 教育の精神を語り、志を託す

私学は教育事業に特有の意図と目的を持つ。教育への志である。したがって、私学の教育事業は本来、教育への志の有無によって立ちもし倒れもする。キリスト教系学校はこのような志、建学の精神を持つ学校である。

中学1年生の聖書科を担当された西邨辰三郎先生は新島襄が死を目前にして作った詩を紹介して言われた。「この詩には死を目前にされた新島先生の、同志社の教育と日本の国を想う真情があふれているのであります！」このように話された西邨先生の声は震え、眼にはうっすら涙があふれているようだった(71-72頁)。教室は静まりかえっていた。真実を込めた西邨先生の迫力に圧倒され感動した静けさだった。

こんなこともあった。中学2年の担任は西島先生で体育の教師だった。風紀



聖書科・讚美歌指導の西邨辰三郎先生（たっちゃん）

の乱れた生徒に正面から挑まれたのは、2学期も半ばになった10月のことである。ある日のホームルームで「何度注意しても君らの態度は改まらない。それで心を入れ替えて真面目にするか、それとも態度を改めないか。俺は職を賭けて皆と勝負したい。どうだ」と言い残して教室を後にされた（84頁）。それ以降、クラスは静かになった。

生涯、忘れられない瞬間がある。高校2年生の1学期に生島先生は「自立の精神をもってチャペルには出てほしい」と希望された。すると、校長のこの言葉を盾にしてチャペルに欠席する者が増えた。そんなある日、校長室に呼び出されチャペル問題に対する意見を求められた。それで、明確に「校長の方針を支持します」と答えた。すると生島先生は大きく見開いた眼でうなづきながら



帰宅途中の佐々木花子さん

「そうかね、そうかね」と繰り返されていた。しかし、私の目に映った校長の顔は苦悩に歪んでいた。「教育とは所詮、一つの魂が一つの心を揺さぶり動かすことに他ならない」。生島先生の言葉である。生徒のために歪んでいる先生の顔を目の前にした時、私の心は激しく揺さぶられずにはおれなかった。

(150-151頁)

こんなこともあった。中学・高校の校舎を一人で掃除しておられたのが佐々木花子さんである。高校2年生の10月、部活動の帰りに珍しく一人で道を急いでいた。そして、前を行く一人の中年女性を追い越そうとした瞬間、偶然目と目が合った。すると、「アンタ、…」と話しかけてこられたのは佐々木花子さんだった。「アンタ、広い校舎を一人で掃除して回るのはしんどいで。それに悪い生徒もおるしな。それでも、なんでしんどい仕事を続けているか、アンタ分かるか？」あの日の花さんは雄弁だった。心からあふれるように「生徒への期待」を語られ、「アンタ、立派な人間になってや!」と結ばれた。その日



校長室の生島吉造先生

以来、佐々木花子さんに掃除され彼女の願いがこめられた校舎を尊く思えた。
(160-161頁)

卒業式を数日後に控えたある日、校長室へ呼ばれた。生島校長はいくつかのアドバイスを与えた後に、こうおっしゃった。「その上で、塩野君にお願いがある。この3年間、私が同志社香里中学校・高等学校で打ち込んできたことを、塩野君には分かってもらえたとは私は信じている。そこで、塩野君にお願いがある。(ここで、生島先生は少し間をおいて、じっと私を見詰められた)。ひとつ私の志を引き継いで、同志社のキリスト教教育を担ってくれないかね！」

(206-207頁) しばらくして、生島先生は私の母にも同じ希望を話しておられたことが分かった。しかし、母はつぶやくのだった。「そんなこと言われても、アメリカやイギリスの大学にやるお金、うちにはないもんか？」生島校長は本気だった。本気で教育の志を託されていたのだった。この付託はキリスト教学校の本質を語っている。すなわち、キリスト教教育への志の継承、この真実によってキリスト教学校は立ち続けるのである。

4 「与える幸い」を生きる教師

キリスト教学校は教育への精神が生きて働いているところに成立する。そこで、西南学院中学校・高等学校で働く教師にとって「教えるとは何なのか」「教師とは誰なのか」を「与える幸い」という立場からまとめたい。

(1) 人格的対話の場で生きる教育

何よりもまず、教育が人を育てる働きであるための前提から始める。教育によって生徒の人間性を育てるために必要な前提がある。教室が教師と生徒の「人格的な対話の場」となっていることである。

先に、教員の働きを分析して4つの特色を抽出した。「見守る」、「教える」、「耳を傾ける」、「教育の精神を語り、志を託す」である。これらの4つはいずれも、「教育は生徒と教師の全人格的な対話の場においてなされる」と語っていた。

したがって、教育が人を育てる事業となるために教室は人格的対話の場とならなければならない。そうしてこそ初めて教育は知識の伝達であることを超えていく。そこにおいて、教師の個性や生き方は生徒に伝わっていく。教えることを通じて生徒は知識を獲得するだけでなく、人間としても育っていく。

そうだとしたら、教師とは誰なのか。彼らは生徒に何を与えることができるのか。

(2) 与える教師

教えるために教師はそれぞれに創意工夫して授業に臨む。そのようにして整えられた講義には彼らの個性や生き方が現れていた。生徒が教科内容と共に教師の実存に関心をもって授業に参加するとき、教室は両者の人格的な対話の場となっている。

そこで、授業においてまず教師が与えるのは教科内容としての知識である。知識を与えるために彼らは様々に創意工夫する。生徒はよく準備された授業に

引きこまれる。けれども、教師にとって授業の準備は小手先の作業ではない。それぞれが持っている豊かな才能や生き方を無意識のうちにも交えながら準備する。だから、対話の場となっている教室において教員は自らの賜物を生かして講義し、自分の生き方をすえながら話すことになる。そこで第2に、教師は人生の先輩として自らの賜物や生き方を間接的に生徒に与えている。

教師が教育において良きものを与えるならば、教える日々によってこそ彼らの人生の中核は形成されていく。教師は生徒に与えることを通して生きているからである。彼らは生徒をふさわしく生かすために教えている。イエスはこのような現実に向けて「与える幸い」を教えられた⁷⁾。生徒もまた「与える教師」から多くを学び吸収する。それは知的レベルに留まらず、人間としての豊かな生き方につながっていく。

このような教育の場である西南学院中学校・高等学校において「与える幸い」を介して教師から生徒へと受容されていくものがある。それは一体何なのか。

(3) 継承されるキリスト教教育

全人格的な教育の場である西南学院中学校・高等学校では様々なレベルで生徒は学び受容する。

そのプロセスで教師から生徒への継承という実存的出来事が起こっている。この出来事について二面性を指摘できる。第1は多様性である。教師は個性と価値観を持ち、多様な生き方をしている。そんな教師が教育現場ではそれぞれの仕方で教えて、生徒は受け止めている。そこから「与えるもの」の豊かな多様性が生まれてくる。第2に根源性である。この特色は西南学院がキリスト教学校である事実から生じている。たとえば、今回の夏期教員研修会は開会礼拝

7) G. シュテーリンは「与える幸い」が「与える者の幸い」であった可能性に言及している。「ここでは人そのものではなく、行為が祝福されている、という点のみ、イエスのほかの『幸いなるかな』と異なっている。だからこれもたぶん本来は、『受ける人ではなく、与える人が幸いである』という形をとっていた、と思われる」。(G. シュテーリン、前掲書、548頁)

で始められ、派遣礼拝で結ばれている⁸⁾。この事実は研修会が単なる知的研修の場ではなく、キリストにおいて教育力の根源に出会うことを示している。なぜなら、西南学院はキリスト教教育を標榜し、学院の人を育てる力の根源をキリストの命に求めているからである。

キリストの命は教育をして人を育てる力とする。この力があるから、西南学院の教育は時を超えて教師から生徒へと継承されていくのである。

おわりに

堤ともみ氏は長年にわたる教員生活を自問しつつ、博士論文『スピリチュアリティが拓く教育の可能性－近代日本のキリスト教教育研究－』を書きあげられた。博士論文で堤氏は繰り返し、元来宗教的用語であったスピリチュアリティ（霊性）が、近年広く人間の精神活動全般において使われている事実を指摘している。この主張は教育現場にも適用できる。

西南学院中学校・高等学校においてはキリスト教徒の先生だけでなく、そうではない先生方も「与える幸い」を生きている。この事実とスピリチュアリティが宗教界を越えて広く用いられている現実是对応している。すなわち、教育力の根源にあるスピリチュアリティ（霊性）の次元からすべての教員は教え、「与える幸い」による人格形成ができるからである。

堤氏は博士論文執筆のために3年間の試行錯誤を繰り返された。教育現場もまた、教員にとっては試行錯誤を繰り返す場である。しかし、同時にそれを「与える幸い」とするならば教員にとって豊かな人生を築いていける場ともなる。教育現場が「西南学院中学校・高等学校で教えてきてよかった」といえる人生の意味を満たす舞台となることを祈っている。

8) 参照、「資料3 2013年度 夏期教員研修会 プログラム」

資料1 『スピリチュアリティが拓く教育の可能性 — 近代日本のキリスト教教育研究 — 』

目 次

はじめに

第I部 スピリチュアリティをめぐる諸問題

第1章 スピリチュアリティとキリスト教教育

第1節 近代日本におけるキリスト教教育研究史

- (1) キリスト教系学校の創立
- (2) 先行研究 — 津田梅子研究を中心として —
- (3) 近代日本におけるキリスト教研究の研究課題

第2節 日本キリスト教教育におけるスピリチュアリティ（霊性）の2系譜

- (1) 日本的スピリチュアリティ（霊性）
- (2) キリスト教のスピリチュアリティ（霊性）

第3節 スピリチュアリティ研究の方法

- (1) 歴史的研究方法
- (2) 心理学的研究方法

第II部 近代日本のキリスト教教育 — 学校創立に関わった教育者の事例研究 —

第2章 津田梅子の異文化性

第1節 教育者としての津田梅子

- (1) 先行研究 — 研究者としての位置づけ —
- (2) 研究の課題 — 教育とキリスト教 —

第2節 「不思議な運命」に導かれて

- (1) 人格の形成 — 日本とアメリカ —
- (2) 教育理念の形成

第3節 津田梅子の教育理念：女子英学塾創立

- (1) 日本女性のために
- (2) 精神的期軸としてのキリスト教信仰
- (3) 教育とキリスト教

第4節 教育理念とキリスト教

- (1) 異文化の狭間で
- (2) 教育理念の現代的意義

第3章 C. K. ドージャーの祈りの結実

第1節 資料と研究課題

- (1) ドージャー関連資料
- (2) 研究課題

第2節 ドージャーの生涯

- (1) 人格形成と信仰 — 日本宣教まで —
- (2) 伝道から教育へ — 西南学院創立まで —
- (3) 建学の礎 — 院長就任から辞任へ —

第3節 西南学院に求める「キリストに忠実なれ」

- (1) 西南学院の使命
- (2) ドージャーの理想

資料1 つづき

- 第4節 教育の理想における祈り
 - (1) 建学の精神
 - (2) 祈りの位置づけ
 - (3) 教育と伝道
 - 第4章 安井てつの「サムシング」
 - 第1節 教育者安井てつの精神形成：2つの価値観
 - (1) 日本的価値観の形成
 - (2) 新たな価値観との出会い
 - (3) 居場所を求めて
 - 第2節 理想的教育の場：東京女子大学
 - (1) 創立の背景
 - (2) 新渡戸稲造学長時代
 - (3) 第2代目学長として
 - 第3節 練り上げられた教育思想
 - (1) 『新女界』『新人』における思想
 - (2) 東京女子大学を支える教育理念
 - 第4節 安井てつの「日本・キリスト教・教育」
 - (1) 真の教育を求めて
 - (2) サムシングとは
 - 第5章 M. B. ドージャーの家庭教育
 - 第1節 家庭教育とキリスト教
 - (1) 近代日本の家庭教育
 - (2) 近代日本におけるキリスト教家庭教育の源流
 - 第2節 M. B. ドージャーの生涯
 - (1) 夫 C. K. ドージャーとともに
 - (2) 女性としての使命
 - (3) 光を放った生涯
 - 第3節 理想の家庭教育
 - (1) 『伝道者の妻』における理想の家庭
 - (2) 『ふるさとへの道』における成長と祈り
 - (3) モードの使命
 - 第4節 現代に生きる M. B. ドージャーの理念
 - (1) 「幼子をキリストへ」の系譜
 - (2) 現在の舞鶴幼稚園
 - (3) 舞鶴幼稚園父母礼拝 ― アンケートの実施 ―
 - (4) 現代に生きるモードの理念
- 資料：舞鶴幼稚園の父母礼拝に関するアンケート用紙および結果
-

資料1 つづき

第Ⅲ部 教育のスピリチュアリティ

第6章 日本・キリスト教・教育

第1節 教育者のスピリチュアリティ

- (1) 津田梅子
- (2) C. K. ドージャー
- (3) 安井てつ
- (4) M. B. ドージャー

第2節 スピリチュアリティの位相

- (1) 宗教性
- (2) 超越性
- (3) 全体性と他の位相

第3節 教育の可能性

- (1) 教育者における「日本・キリスト教・教育」
- (2) 可能性を拓くスピリチュアリティ

おわりに

参考文献・資料

資料2 『キリスト教教育と私 前篇』目次

序

第1章 うれしいやないか、シオノ

第2章 山田小学校入学

第3章 真新しい気持ち

第4章 受験生の悲哀

第5章 同志社香里中学校入学

第6章 死の問題

第7章 勉強はするものだ

第8章 同志社香里高校進学

第9章 大里牧師を生かした真実

第10章 託された志

附録

- (1) しあわせな人
- (2) 母のこと
- (3) 父のこと
- (4) たこ焼き屋のおばちゃん
- (5) 忘れえぬ師
- (6) ほくの青春
- (7) 同志社香里の花子さん
- (8) ほくのクリスマス

あとがき

資料 3 2013年度夏期教員研修会 プログラム

1日目	8月28日(水)
-----	----------

9:00	集合
9:15	バス出発
11:20	ホテル到着
11:30	昼食・休憩
12:30	開会礼拝 奨励：宮崎宗親 司会：三上 伴奏：大谷 オリエンテーション 司会：宮崎
13:10	講演1「西南学院の教師たち」 塩野和夫先生 司会：中根
15:00	分団「自分が西南に就職した意味と課題」
18:00	夕食・新任のお話
19:30	夕べの祈り 話：伊原幹治 司会：奥畑

2日目	8月29日(木)
-----	----------

7:15	早天礼拝 奨励：藤野慶一郎嬉野教会牧師 司会：坂東
8:30	朝食
9:30	講演Ⅱ「西南学院に期待すること」 寺園喜基先生 司会：宮崎
10:30	全体会 司会：宮崎
11:45	派遣礼拝 奨励：坂東資郎 司会：田中 裕
12:30	昼食
13:30	解散 バス出発
15:40	学校玄関前バス到着予定
